幸 しあわせ

敦賀市立中郷小学校

五年　三田村彩泉（みたむらあみ）

西村桜（にしむらさくら）

←

各務原市立鵜沼第二小学校

六年　鈴木綾華（すずきあやか）

熊谷瑠晏（くまがいるあん）

熊谷綾夏（くまがえあやか）

岸本瑠莉（きしもとるり）

森田楓（もりたかえで）

相談……。

このカルチュラム家では、常に行われていることです。貧しさからぬけ出すためには森の奥の宝物を手に入れるしかないのです。この家族には、メアリーとメーシーというふたごがいます。ふたごは、両親を悲しませないようにと森の奥に行く決心をしました。

今日は、ふたごが冒険に行く日です。

二人はさっそく元気に家を出ました。

「行ってきまあす」

「気をつけて行ってらっしゃい」

高い声をあげたのは、母メリーです。ふたごは、森の中に入って行きました。

ザワザワ、サワサワ。

気味の悪い音が聞こえてきます。そこで、二人の兄弟と出会いました。マークとランディです。この兄弟も家が貧しくて、冒険することで宝物を手に入れ

ようとしていました。四人は、いっしょに冒険をすることにしました。
ずっと森の奥に入ると、夜は、きれいな星が出るので、夜をここで待つことにしました。
夜になりました。
「あっ、流れ星」
「本当だ、お願いしなきゃ」
二人が願ったことは、（無事に、わたし達の家にマークとランディもいっしょに帰れますように）ということでした。夜ご飯を食べ終わると、みんなねました。
朝になりました。今日もみんなはりきっています。
「うわぁ、これ何だ」
不思議な虫にも出会いました。みんなが奥に進んで行くと、別れ道がありました。

「右か左どっちかに進むと『かがやく（宝物のある）場所』に行く近道だ」とかん板に書いてあります。メアリーもメーシーも右だと思いました。そこで、右に進むことにしました。道にそって歩いて行くとポストのような箱がありました。

「どちらかを引けば、地図がのっている、だが、一回しか引けない」と書いてありました。

メアリーは、星マークの方、メーシーはハートマークの方だと言い合ってどちらもゆずりません。とうとう、けんかになってしまいました。マークとランディもハートの方に賛成したのでハートを引きました。

「やったあ。こっちが地図だ」

「星だと思ったのに」

「ね、ハートの方でしょう」

四人は、地図を見ながら森の奥に進みました。

「うわあ」
「まぶしい」
「かがやいている」
「とってもきれい」
ついた場所は、きれいなダイヤで囲まれた大きな大きなお城でした。中に入ってみると、一通の手紙が、ありました。
「いらっしゃいませ。この部屋の奥に行くと、再び冒険が始まります」
と書いてありました。その横には、
「冒険を続けるのだったら右のぼう、帰るのであったら左のぼうを引いてください」
とも書いてあります。四人は、迷いましたが、宝物が見あたらないのであきらめて帰ることにして、左のぼうを引きました。
そこには、帰る道の地図がありました。

「やったあ」

メアリーとメーシーは帰る準備をしました。そして、地図を見ながら、また、四人で森を出るために歩き出しました。森の出口が見え始めました。

先頭を歩いていたメアリーが振り向くと、ついてきているはずの三人がいません。

「あれ、メーシーがいない」

「メーシー、メーシー」

と、必死でメアリーはさけびました。★

一方メーシーたちは、

「うっ、いててててぇ」

「メーシー、大丈夫？」

「うん」

メーシーは辺りを見わたしました。（ここどこだろう……）そこは、きっちり

と片づいたお城の台所でした。
ぎゅるるるるぅ～。
「おなかへったぁ」
メーシーを気づかったマークとランディは、冷蔵庫を見つけて開けました。中には、くもの巣がはった鏡が入っています。メーシーは不思議に思いました。ランディが冷蔵庫から鏡を取り出してくもの巣を取ると、水が入っているような鏡でした。しばらくして、鏡がピカーンと光り、メアリーが映ったかと思うと、ランディがすいこまれていってしまいました。
「あれ、ランディ！　鏡にすいこまれちゃったよ」
「大変だ～！」

そこは、メアリーのいる森の中でした。
（やったー。さぁメアリーを助けにいくぞ）

しばらく森を歩いていくと、服にトトと書かれた黄色い犬がいました。
「おーい、トトく～ん。メアリーという名前の女の子を知らないかい」
「知らないよ」
「背は僕より小さくて、髪はストレートでかたぐらいまでだよ」
クンクン、クンクン。
「ほらこっちだよ」
（そういえば、僕はなんでこんな黄色い犬としゃべっているんだろう）
「ほらそこさ」
「はぁー」
メアリーは、ため息をついていました。
「メアリー、そこで何してるんだい？」
「まぁ、ランディじゃない。あれ、メーシーとマークはどこにいるの？」
「お城だよ」

「おい、オレのこと忘れてないか」
「あー、そうだったそうだった。この犬は、メアリーを探すのにすごく協力してくれたワンちゃんだよ」
「ワンちゃんってなんだよ。オレにはちゃんとした名前があるんだ。トト・ワンコ。かっこいいだろう」
「そんなにかっこよくもないと思うけど……」
「ふんっ」
「それはいいとしてお城に向かわないと」
「トトくん、お城に案内してくれるかい」
「うん、その呼び方気に入った。案内してあげるよ」
「ありがとう」
「ちゃんとついて来いよ」

ピカーン。
冷蔵庫の鏡がとつ然光ったかと思うと、たちまちマークとメーシーもすいこまれていきました。
「わぁ〜」
「あれ？　マークじゃないか」
「あ〜！　メーシー達！　どこ行ってたの」
四人は再び一緒になったのです。
「さぁ、こんどこそ家に帰ろう」
マークが言った時、ワンワンとトトがほえ始めました。
「おい、トトうるさいぞ」
ランディが言いました。
「だって、だ、だってぇ〜」
「なんだよ。早く言えよ」

マークがせかします。
「その鏡、たか……ら」
みんなが鏡に目を移しました。
「どういうこと？　トト？　えっトト？　どうしたの」
メアリーがトトに話しかけましたが、トトは答えません。
「トトが……石になっちゃった……」
メーシーの声は、だんだん小さくなっていき、メアリーとメーシーは泣き出してしまいました。
メーシーは足がすくんで立てず、石のそばの葉っぱに雨のような涙が落ちていきます。
「トトを元に戻してあげようよ」
「そうね。宝なんかよりトトちゃんを戻してあげましょう」
キラーン。

鏡がいきなり光り出しました。そこには、元の姿に戻って喜んでいるトトが映し出されています。

「これって、トトなの？　動いてるよ？」

四人は、固まったトトをだいて家へと歩き出しました。トトは動かないままです。

メアリーの涙が石になったトトに落ちていきました。

「ク～ン。あ～あ、よく寝た」

「トトちゃん!!　目覚めたのね」

キラーン。

またもや鏡が、光りだしました。そこには、メアリー、メーシー、マーク、ランディやトトが大きな家で仲良く楽しそうにくらしている様子が映っていました。

「これって、私たち？」

メーシーが、
「ねぇ、とっても幸せそうだねぇ」
その時メアリーが、
「もしかして、宝って幸せのことだったのかなぁ」
するとトトが、しっぽをふって喜びました。
「やっぱり！　幸せが宝だったんだ」
四人は声をそろえて言いました。
「この宝をお母さんに届けよう!!」
四人と一ぴきは、家へと帰りました。

十年後、メアリーたちは、とても幸せにくらしていました。
「旅行の準備できた～？」
その時、鏡はひそかに光っていたのでした